（研究ノート）

日本政治文化の三重構造性
——近代主義からのひとつの日本論——

石　積　　勝

さまざまな日本論がある。さまざまなレベルでの日本論がある。さまざまな角度からの日本論がある。論ずる対象は巨大であり，論ずる側の主体はほとんど無限に存在する。アカデミックな検証に耐えうる包括的な，日本全体を対象とする日本論を提供しようと考えれば，それは初めから無謀な試みとなる。一方で，ごくごく短時間で例えば外国人，日本に関する基本的知識を欠いているような外国人に対しても日本全体についての，あるいは日本人についての全体的（holistic）な説明が求められる場合がある。以下に提供するものは，そのような場面で，私がここ数年行ってきた試みのひとつである。

以下の日本論は，したがって，英語で提供されるケースが多い。しかし，日本人学生相手に，日本語でこれを話すことも，もちろんある。90分で話し切らなければならないこともあるが，もう少し丁寧に，例えば2，3カ月かけて論ずるケースもある。[1)] いうまでもなく，近代主義からのひとつの見方であるという前提付きでこの日本論を提示しているが，この日本論，それなりにその後の考察を導き出してきたようである。そこでこの際，文章化しておきたいと考えるに至ったわけである。

前述のように，あくまでも holistic に展開する日本論であるので，精密な実証を展開するというよりは，むしろ問題提起としての日本論となる。

1　政治文化（political culture）からの日本，あるいは日本人に対するアプローチ

以下に展開する日本政治の三重構造性という考え方は，政治学の範疇でいえば政治文化論ということになろう。政治文化は，もう少し日常的な言い方に置き換えれば，政治風土ということになるが，この言い方はあまり感心しない。なぜならば政治風土という言葉にはなにやら運命決定論的な，没主体的な，自然環境を含めて環境に大きく左右されるというニュアンスがつきまとうからである。政治文化はまさしく〈文化〉であるから，人間自身の営みを問題とする。それは第一義的に人々の精神の構造，それを基盤にした時代の精神，エスプリを問題にする。主体的，自覚的な選択の問題を前面に出すことになる。私もそのようなものとして，つまり我々の政治文化は所与のものではなく，必要ならばこれを大きく改変できるものなのであることを前提として論じたい[2)]。

日本の場合に，精神なりエスプリなりがどこまで西洋のそうした語彙と対応関係で論じられるか，これは社会理解のための〈カギ〉となる多くの日本語の重要用語に関わる悩ましくも本質的な問題であるが，その問題にはここでは深入りしない。ただ，以下に展開する三重構造性論議は基本的に西洋近代の中で培われてきた社会科学用語，概念を使うことによって成り立っていることは事前に断っておいたほうが良いと思う。さらに，日本という非西洋社会を論ずる際に，そうした西洋近代の知的産物としての分析枠組み，分析概念を用いることの限界について，私はじつは強く意識しているひとりであるということも念のために言っておきたい。西洋近代の中から生まれた分析枠組みを乗り越え，新たな社会理解のための分析枠組みや用語を再構築することは，この国で社会科学に携わるものの責務であるとの問題意識は強烈に持っているつもりである。「近代西洋政治学の罠[3)]」などという文章を書き，

大風呂敷を広げてみたりもしているが，これを願望にとどめず，具体的に政治学グランド・セオリーの再構築を急がねばならないと，自分自身に言いきかせている。

そうした問題にもかかわらず，以下で展開する議論は，それなりに日本考察のひとつの見方として検討に値するのではないか。そのように経験的に考えているのである。以下の考察が静的に受け止められるのではなく，その限界についての指摘も含め，ダイナミックに受け止められればと思う。

2　日本政治文化の三重構造性

結論から述べたい。日本の政治文化，あるいは日本人の政治意識はその三重構造性を特徴としている。臣民意識，市民意識，大衆意識の大きく3つの意識が並立する形で，あるいは臣民意識に市民意識が，さらにその上に大衆意識が乗っかり堆積する形で三重構造性を形成しているのである。この三重構造性は特定の個人にも言えるが，同時にその集合体である集団の性格，例えば日本全体の政治文化についても言える。ここでいう政治文化はその最も広い意味合いにおける政治文化である。したがって，日本人の意識，日本社会の性格と言い換えてもよい。

臣民意識，市民意識，大衆意識はそれぞれ，それが培養された歴史的背景を当然ながら持っている。臣民意識については近代市民社会成立以前の，即ち封建体制下の社会構造と色濃く結びつく。市民意識は言うまでもなくヨーロッパ啓蒙時代とその具現化である近代市民社会とパラレルの関係にある。大衆意識はその時代的出自を論ずるにあたり，やや慎重を期さなければならない。政治的にはナチス・ドイツを支えたドイツ大衆のまさしく大衆意識の問題を無視することができないが，経済社会構造で言えば，いわゆる大衆消費社会の出現に伴う意識変化の中で生成した。日本の場合について言えば高度経済成長，あるいは所得倍増計画の成果としての1960年代以降に出現した

ものということになろう。

この3つの意識はウエーバーのいう〈理念型〉であることは言うまでもない。日本の全体像について大胆にも論じようというわけであるから，ここからこぼれおちる森羅万象がそれこそ無限に存在すること，当然である。それにもかかわらずこの理念型に現時点ではなにがしかの有効性があるのではないかと考えるのである。

この3つの意識は日本人各個人に等しく内包されているわけではない。ある者は強く臣民意識を持っているであろうし，ある者は逆に大衆意識によってその日々の行動を規定されているであろう。世代間の違いを見て取ることもできよう。一般論としては，古い世代ほど臣民意識を保持し，若い世代ほど大衆意識の只中にいると言えそうである。また時の社会情勢の中で，ある意識が強く前面に出てくる場合もあるし，逆に表面的には影をひそめる場合もある。したがって，個人についても集団についてもこの3つの意識が常に一定のプロポーションで存在したり表出されたりすると考えるとすれば，それは現実から大きく逸脱する。あくまで理念型としてとらえるべきである。

そうした前提を踏まえた上で，しかしながら言えることは，日本人あるいは日本社会においては，どうやらこの三重構造性が他の社会（例えば他のいわゆる先進民主主義社会）に比較して際立って三重構造性として存在しているということである。特に日本の場合，その臣民意識が徹底的に否定ないしは克服されず，相当程度温存されたかっこうで歴史的に推移してきた。そのことは大きな意味を持っている。そのことを背景に，日本が顕わにしている政治文化の現代的特徴，現代的困難は，他の先進民主主義諸国との比較において際立っている。日本，アメリカ合衆国，英国と3つの社会を並べて大胆に比較し，それぞれの意識にプロポーションを与えるとすれば，下記のごとく描くことが可能であろう。ただ下記の図はやや恣意的な3カ国の比較であることは免れない。それでは非西洋諸国，特に第三世界の国々をどのように位置づけ比較するのか。この点を含め，三重構造性で分析することの問題は

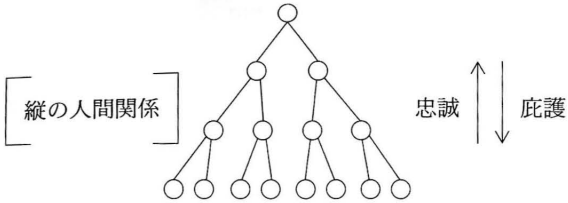
図1

残る。

3　臣民意識（subject mentality）

ここから先の議論では臣民意識を「subject mentality, S」として表したい。subject という語には従属という意味が含まれる。sub とはもちろん下という意味である。英語の苦手な学生諸君にも subway, subculture, subordinate, submarine, などという単語を出しながら説明すればすぐに解ってもらえる。I am a British subject...という歌詞が，誰の歌だったか，レゲエのある歌詞に出てくるので私はそこから話を始めるのだが，それはけっこう学生の興味を引く。死語になりつつあるこの臣民という言葉を日本語の文脈で説明するとき，よくひきあいに出すのは，〈大臣〉という言葉である。臣民の中での大物すなわち大臣である。我々の住むこの日本社会がいかに深く〈言語の政治性〉で覆われているか，大臣という言葉を皮切りに，ふだん無意識に使っているさまざまな言葉を挙げて論ずるとき，彼らは目を輝かせる。日本語の問題を皮切りに，我々の生活，私的なそして社会的な生活の中で，いかにこの臣民意識が生きつづけているか，さまざまな例を挙げて説明することが可能である。そこでの人間関係の原型〈プロトタイプ〉は上下の関係であり，主従の関係であり，親分子分の関係である。図式的に示せば図2のごとき人間関係となる。

図2　Sの人間関係



Sは西洋封建社会で醸成され，日本では武家社会の確立とともに西洋のそれとパラレルの関係で登場し定着したと言えよう。明治維新を迎えるまでの日本社会における社会統営の形態であり，人間関係の原型，プロトタイプである。もちろん現在，歴史のデスクールの再構築が進んでいるわけであり，かつてのように明快にかつ無批判に封建社会という用語を使用することは，その最近の試みに対する無自覚・無知をさらすことになるが，そのことは上記1で触れたように，また別の論考の中で述べたい。また西洋封建社会と日本のそれをどの程度パラレルなものとして議論できるか，この点についても新たな見直しが進んでいるが，ここではそれ自体を問題にせず議論をさらに前に進める。

明治維新は革命であったのか改革であったのか。これは過去延々と検討の課題になってきた。この問題は単なる過去の，歴史の問題ではなくきわめて現代的な問題であり，そうである以上，さらなる論争が今後も続くことが予想される。しかし，それにしても維新以前の社会構造，それを支えた精神がかなりの程度まで温存されたことは紛れもない事実である。

ヨーロッパ近代は封建体制に対する血の戦いによって勝ち取られたのだが，そこには近代社会の新たな理念と，それを担う新たな階級的担い手が明確に存在した。これに対して，日本で起こった維新は必ずしも新たな階級的担い手の登場を見ることなく，旧体制におけるエリート層の一端を担ったはずの下級武士によって進められることになる。彼らは旧体制のエトスを骨の髄まで身につけていたはずである。つまり精神構造において明確な画期を持たぬ

形で社会体制，社会構造の大変革が成されたわけである。こと政治文化という観点からは臣民意識を抹殺することなく，温存する形で新たな制度の導入が達成されたという点で西欧近代とは明確な違いを見せるのである。Sが温存され生きつづけたという意味である。

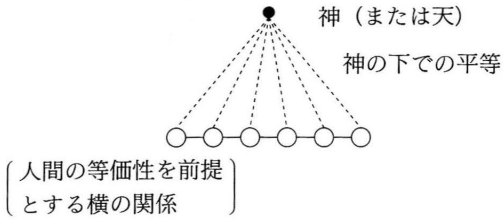
4　市民意識（citizen mentality）

明治維新は文明開化であり，その文明とは当然のことだが西洋近代であった。日本は急ピッチで，ありとあらゆる西洋近代の文物を輸入することになる。しかし和魂洋才という言葉が表すように西洋近代を支えた肝心かなめの魂，つまり時代精神については一定の条件をつけてこれを受け入れることになる。おそらくはこの選択はやむをえないものだったのだろう。近代化は主体性つまり国民的アイデンティティーの問題に目を瞑って成されるわけがなく，和魂はその意味内容がどれほど明確にされたかは別にして，大きな役割を果たしたのであろう。中国においては和魂洋才とパラレルの関係で中体西用という言葉が使われることになる。

ただしこの中体西用というスローガンはどの程度広く行き渡ったものであるか，大いに疑問ではある。現代中国の知識人と，あるいは一般学生と議論する中で，このタームは和魂洋才ほどには意識されていないというのが私の実感である。ともかく，和魂洋才にせよ中体西用にせよ，それらがどの程度広く民衆のレベルまでスローガンとして浸透したか大いに疑問ではあるが，イデオロギーとして一定の役割を果たしたことは否めない。

いずれにせよ，明治日本は西洋近代の精神的核心である〈市民〉いう意識（citizen mentality, C）を多分に欠落させたままで近代化を推し進めることになる。「新しいぶどう酒には新しい皮袋を」ということわざがあるが，明治日本は新しい皮袋に古いぶどう酒を注ぎ込んだ感がある。このことは日本の明治以降の歴史において，常にそれこそ途切れることなく我々を悩ますこ

図3　Cの人間関係



とになる。じっさい，過去130年間，日本の最大の悩みはこの点にあったと言ってよい。日本の明治以降の歴史を学生相手に語るときに，私は財布の中からお札を取り出し，小道具として使う。1万円札の福沢諭吉，1,000円札の夏目漱石，5,000円札の新渡戸稲造それぞれが，それぞれの時代を背負いながら，それぞれのやり方で西洋近代と格闘してきたことを学生諸君に，あるいは外国人に語ったときに，彼らは興味深く聞く。そしてこのことが実はきわめて現代的な問題，消えることのない我々の深い悩みであることにも思いをはせる。

ところで西洋近代に勃興し権力の簒奪に成功することになった市民階級は，どのような人間関係のプロトタイプを念頭においていたのであろうか。それは端的に言って上記のように図式化することのできる人間関係を理念型として掲げていた。

西洋近代の申し子であったアメリカ合衆国の独立宣言その他は，まさしくビジョン図3の高らかな宣言であった。合衆国の誕生は啓蒙思想による新たな社会のビジョンの誕生，実験を意味するが，合衆国の成立後，今度はフランス革命によってヨーロッパ大陸においても共和制が誕生することとなる。こうして新たに定着した近代市民社会を日本もおくればせながら導入することとなる。もちろんCが当初輸入精神であったことは致し方のないことであった。またそうであってもこれが画期的な出来事であったことは間違いない。明治以降の社会変動の中で紆余曲折を経ながらこのCは徐々にではあるが，この日本社会の中に定着することになる。

敗戦はCのさらなる浸透の契機であったが，必ずしも強力に根を張ることにはならなかった。占領期日本の政治文化がその後の50年の紆余曲折の中でどのように定着し逆に風化したか。今我々はそのことを深く検討せざるをえない局面を迎えている。朝鮮戦争と軌を一にするいわゆる逆コースと呼ばれる政治転換はじつは政治的な，特に国際政治上の右旋回，保守化というようなレベルだけの問題ではなかった。いわゆる戦後民主主義の息吹，即ちC定着の可能性に関する大きなブレーキとして機能することになる。

私は1950年に旧新潟三区で生まれ，そこで育ったが，小学中学高校と時を経るとともに民主主義教育，市民教育の，熱意が学校教育の中でも減退していったことを実感として感じている。2つの要因があったのだろう。ひとつは年齢を経るとともに上級学校への進学を学校が意識せざるをえなくなるという側面である。民主主義教育，市民教育が質量ともに教科の勉強に道を譲っていく，その過程があったのであろう。もうひとつは日本の逆コースとの関係である。逆コースは単に非武装中立の政治選択からの撤退を意味するのではなく，戦後の理想主義から現実主義への転換を意味していた。それは政治上の転換だけではなく社会全体のギアーチェンジを意味しており，その中で教育現場での民主主義教育，市民教育に対する熱意の急速な減退があったのではないか。

こうしてCは明治以来，何回かの大きな契機を潜り抜けながら日本社会の中で一定の定着をみることになるが，同時に遂に完熟することなく，つまりそれ以前の支配的意識であったSに全面的にとって代わることなく，併存することになるのである。

5　大衆意識（mass mentality）

Sが温存されたままでCの導入がなされ，そのCも今日に至るまで不十分な形でしか定着しなかったという認識，すなわち日本においては前近代と近代が併存しているという考え方は，何回となく繰り返し繰り返し表現の形を変えて登場してきた。俗にそれは「古い日本」「新しい日本」とも言われる

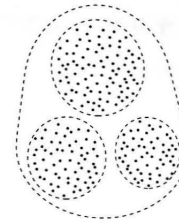
し，さまざまな解釈上のバリエーションを含む形で「伝統に根ざした日本」「西洋化した日本」といった表現でも論じられる。じっさいある周期をもって繰り返しこの国の論壇を席巻してきた日本論あるいは日本人論は，大まかに言えばその多くがこうした二項対立の中で語られてきたのであった。「古くて新しい国」であったり，「西洋と東洋の混在」である。即ち「封建的遺制を残す近代日本」が問題であったのである。しかしS，Cに加えて新たな注目すべき意識変化が起こっていたのではないか。

日本は60年代初頭からいわゆる高度経済成長に突入する。その結果が大衆消費社会の成立である。大衆消費社会は当然ながらそれに対応する人々の意識変化をもたらす。大衆消費社会すなわち mass consuming society の出現に伴って大衆意識（mass mentality, M）とも言える意識が登場したのである。Cと大衆意識Mの違いはどこにあるのか。Cは輪郭の明確な個人が理念型として基底にある。個人は最小の単位であるのみならず，なにものにも替えられない価値であり，個人としての意思，決断は他のほとんどのことに優先されると教えられる。市民社会は個人主義と切っても切れない関係にあるが，それはそのように特別な地位を与えられた個人が，その不可侵性にもかかわらず，なお公に対してコミットしていく能力と動機を十分に持っていると想定された社会であった。

大衆消費社会においてはこの個人の輪郭が微妙になる。Cにおける個人は強い信念，心情の保持者であり，同時に眼に見える組織に対する，あるいは見えないシステムに対し不動の「帰依」(commitment) を持つものだと考えられていた。一方，大衆消費社会における個人は，信念やコミットメントあるいは一貫性（integrity）に対して懐疑的である。彼らが住む社会は生産の原理で動く社会ではなく消費の原理で動く社会である。生産の原理で動く社会では，「個人はたえまなく自己を非合理な衝動的な力から解き放ち，理性的な眼で自己の行動を点検しなければならない」，すなわち「不断の自己抑制と自己審査こそ，人間の個人としての尊厳の根拠である」。一方，消費

図4　Mの人間関係

（アメーバ状の人間関係。しかしグループ意識もある。時には〈大衆〉に対して〈分衆〉という言い方もある。）



の原理で動く社会では「人間は現に自分が何を望んでいるかについて，自分の気持ちそのものがわからなくなる」。「19世紀の個人は，欲望の限度は知らずとも，少なくともその向けどころは知っていたが，20世紀の個人は欲望の方向さえ見失って，いわば二重に不安となっている」のである。[4)]

そしてそこでの人間関係は後でもまた触れるが上図のように描くことができよう。

6　三重構造性に関する具体例その1，筆者自身のこと

三重構造性の論議を具体的に例を示して進めようとする場合に幾つかの可能性がある。そのひとつは私自身のことを自己紹介する形で行うことである。この方法は特に日本についてほとんど知識を持ち合わせていない外国人学生などに有効である。下記のように私の体を3分割し説明するのである。

足元から腰までの私は，いわばSの具現として表現される。私の父は9人兄弟の長男であったが，その父に嫁いだ母は当時健在であった父の両親プラス私を含めた3人の子供プラス父の末の妹と実際に同居し，同時に陰に陽に父の兄弟姉妹をサポートしなければならなかった。典型的な大家族制の中で人間関係を切り結ばなければならなかった。日本の戦後50年の変化はまことに急激で，私自身は40半ばまで独身であったような，この急激な変化の象徴のような人間であるが，それにしても私自身の体内に根っことして，この古い日本がドンと構えている。ついでに言えば私の父の名は〈忠孝〉であった。

図 5

そのすぐ下の弟の名は〈仁義〉である。雪深い新潟の生活とともにそうした家族の構成を語り，その中で育まれた私自身には明確にSの政治文化が刷り込まれていることを語るのである。

それではCはどうなのか。前述したように私自身はそれを小学校時代に公教育の場で相当たたきこまれた記憶がある。時代がそうだったのだろう。アメリカ直輸入の民主主義教育が疑問なしに熱烈に喧伝された最後の世代であったのかもしれない。そこで受けたものは実感として記憶に残る市民教育であった。その後の中等・高等教育の中で与えられる，社会科学的な書物や授業はそれでは市民教育ではなかったのか。そんなことはないだろう。じつは我々が学ぶ社会科学的知識は，依然として基本的には西洋近代の産物なのである。建前論とはいえCが堆積されないはずはない。さらに私の場合，西洋社会での生活体験がCをさらに強化することになっているのだろう。比較で言えば多くの日本人に比してCは内面化，肉体化されているのではないかと思う。

Mのほうはどうなのであろうか。大衆消費社会に突入するまさにその時期に青春時代を過ごしたことは無視できないことである。大衆消費社会のバロメーターのひとつである大学進学率は，現在50％に達しているが，その流れは私が進学する頃に弾みをつけて準備されていた。いわゆる先進国における学生反乱の運動は政治的な運動でもあったが，もう一方で，押し寄せる大衆社会状況に象牙の塔が有効に対応していないことへの告発でもあった。そのような時代に私は多感な青春時代を送っている。後述するように，私たちの

間ではリースマンの『孤独な群衆』(1964年，みすず書房）は大いに話題になり，大衆社会状況の中で新たに生まれた新しいメンタリティーをリースマンの言葉を借り〈他者志向〉と仲間うちでお互い自嘲的に使いあっていたのである。

大衆社会状況に高等教育が対応してこなかったつけが，2000年の今，回ってきている。特に日本においては少子化の問題とともに噴出している。この点における1970年以降の米国の高等教育機関の対応と日本のそれとは好対照を成しているといってよい。私の場合，学生相手にものを語るとき，この大衆意識メンタリティーを総動員していることを認めざるをえない。首から上の私の身体は明らかに若い学生諸君と共有しているのである。

以上のように私自身の身体を３つの部分に分けて説明する形でこの三重構造性を論ずることが可能である。私自身は同世代の日本人との比較ではやはりＣを強く持っている人間なのではないかと付け加えることもある。そしてこの３つの意識の表出の場面はかなり流動的である。ジェネレーションにも因るし，教育程度にも関係する。また都市住民かどうかにも関係する。なによりも一人ひとりの個性と歴史に関係する。しかし大まかに言えば，日本人はこれを相当程度並列的あるいは重層的に持ち合わせているのではないか。これが私の議論である。あえて大胆に日・米・英それぞれの三重構造性のプロポーションを図１において示したわけである。

7　三重構造性に関する具体例その２，田中角栄という政治文化

日本に関する知識のほとんどない外国人に対しては，６で説明したような方法で，すなわち私自身を自己紹介する形で三重構造性を論ずることにしている。これは分かりやすいし，目の前にいる生身の人間を材料にしているだけに興味を引くようである。日本人には，あるいは日本通には，政治家，田中角栄を引き合いに出すことが多い。田中角栄がなぜ戦後最強の政治家たり

えたのか，それを解き明かす形で，三重構造性を論ずることが可能であろう。

田中角栄は日本の政治文化をみごとに体現していたというのが私の見方である。田中は確かに天才であったのかもしれないが彼の才能は日本の現実に見事に密着し，シンクロナイズしていたのであり，それは三重構造性と言えるものであった。その意味で彼はやはり時代の寵児であった。

雪深い新潟の地で生を受け，立身出世の物語を具現した田中は，終生地元との関係を維持しつづけた。地元の選挙民から圧倒的な支持を得つづけたことはよく知られている。田中の最後の選挙戦となった1986年の衆院選は，都会からの，いわば開明的市民の代表選手として作家野坂昭如が挑戦者として戦いを挑んだ選挙であった。私自身は長い外国生活を終え，ちょうど新潟三区に職を得たこともあり，興味深く何回も両候補の選挙演説を聴きに足を運んだ。そこで深く感じたことは田中が地元選挙民との間にみごとに義理人情の関係を維持していたことである。市民として前近代的な田中的なるものに立ち向かった野坂の前に立ちはだかったのはSであったと言って良い。親分・子分と互いに呼び合う田中とその支持者の間には田中のカリスマ性に支えられて，しかし，やはり強い上下意識，服従意識が表れているのである。

一方で田中はCの具現者でもあった。その成功物語はある意味では戦後民主主義の可能性を具体的に示すものであった。強力な係累を背景に持たない一介の小学校出の田舎者は今太閤ともてはやされるが，そこに人々は個人が自分自身の才覚ひとつで花開かせる具体的な姿を見たのであった。前近代が帰属価値社会（なにであるか）を問題とするならば，近代は達成価値社会（なにができるか）が問題であるという。田中は後者のすなわち近代的社会の輝く実例となった。殿様意識ではなく庶民感覚こそが田中の強みであった。一方では親分・子分的にふるまいつつ，一方では対等平等な人間関係への感性を持つという稀有な資質を田中は持ち合わせていたといえる。Cはその中に合理主義を含むが，その点において田中は群を抜いていたということができよう。田中の合理性は社会科学的，理念的合理性ではないが，体験に裏打

ちされた確かな計算であり，そろばん勘定である。ある種のギブ・アンド・テイク，即ち契約の概念に通ずる合理性であった。戦前の日本社会のスローガンが〈富国強兵〉であったとすれば戦後民主社会のそれは〈平和金儲け〉であったが，田中はまさにその戦後型民主社会，市民社会の申し子であった。田中はコンピューター付きブルドーザーともあだなされたが，コンピューターとはまさにこのことであった。

田中は大衆操作の天才でもあった。Mのひとつの大きな問題は，それが政治的操作（マニュピュレーション）の対象になりやすということである。信念とか信条というものと最も遠いところの意識がMであるだけに，それは政治的にはきわめて流動的であり情緒的でもある。付和雷同する傾向を持つ。田中は大衆を前にして疑問の余地を残さず断定的なものいいをすることによって大衆の心を摑んだ。彼の発言の中には「たぶん」「かもしれない」「望ましい」などというような言い回しは登場しない。Mのひとつの特徴は価値観の多様化ではあるが，それぞれの個人がくっきりとした輪郭を持つ自分自身の価値を保持しているかとなると必ずしもそうではない。じつに危うい価値観の多様化なのである。この大衆の心理に関する理解において田中は群を抜いている。田中は高級官僚の多くを取り込むことに成功したが，それは単に官僚たちを物量作戦で落弄することに成功したがためだけではない。田中は官僚たちの中に微妙に生まれつつあるある種の小市民性を冷徹に見ぬいていたのであった。

こうして見てみると田中角栄が圧倒的な大衆的支持を得て登場し，ロッキード事件による有罪判決にもかかわらずその政治生命を維持しつづけたその背景が納得できるのである。彼はおそらくはいかなる同時代の政治家よりも日本政治文化の分身であり具現者であったのであろう。驚異的な支持率を得て日本のトップリーダーとなった理由の大きな部分が解けてくる。前近代的風土の中に生を受け，浪花節的人間関係を維持した田中は同時に冷徹なるそろばん勘定を持ち合わせた近代的合理主義者でもあった。さらに大衆に相対

するときに発揮されるカリスマ性はSの中で育まれるカリスマ性とは別のものでもあった。それはむしろMの中での新たなカリスマ性であった。その意味で田中こそが戦後日本の政治文化の具現者であった。多くの日本人は彼の中に自分自身の姿を違和感なく見出したのではなかったか。

戦後日本のトップリーダーたち，特に田中以降の何名かのリーダーたちを考えてみよう。田中のライバルであり，すでに世を去っている三（角）大福についていえば，三木は市民意識に訴えたタイプであった。加えてある種のカリスマ性で大衆に接近した。臣民意識の部分には大きな弱点を持つ。大平，福田はいずれも合理的思考を中心に戦後民主主義の体現者として一定の存在感を放つ。しかし臣民意識への訴えにおいて大きく田中には劣り，大衆の心を摑むという点においてもはるかに見劣りする。竹下はもっぱら臣民意識と市民意識を動員して権力維持を図ったように見える。細川は新しい日本の政治文化を予感させる形で登場する。臣民意識を完膚なきまでに払拭し欧米型政治文化の成熟のシンボルとして登場したのであった。しかし，いずれの政治家も田中ほどにはこの3つの意識にそれぞれ強力に訴えることはできなかった。田中はまさしく日本の政治文化そのものであり，時代の寵児であった。

8　リースマン『孤独な群衆』と三重構造性

デーヴィット・リースマンの『孤独な群衆』を紹介することによって三重構造性の議論に厚みを持たせることが可能であると考えている。アメリカからの来訪者には明確な視点を提供することになるのはもちろんだが，経験的に言えばそれ以外の国々からの来訪者に対してもこの議論，すなわち私の三重構造性の議論とアメリカ人社会学者によるアメリカ人分析を連動させて論ずること，は興味深く映るらしい。

『孤独な群衆』は1960年代の代表的アメリカ人論であるが，その域をはるかに超え，日本を含む多くの国々で広く読まれることになる。リースマンの分析が先進諸国に明確に現れつつあった大衆社会状況を鋭く抉り出したから

であろう。広く知られているとおり，リースマンはアメリカ人のメンタリティーを3つのカテゴリーに分類する。失われつつある伝統指向型（tradition directed）アメリカ人，アメリカを生み出し，支えつづけてきた内部指向型（inner directed）アメリカ人，台頭しつつある他者指向型（other directed）アメリカ人。直接にはアメリカ人を論じたにもかかわらず，多くの先進諸国で話題になったのは，それらの国々で進行する大衆社会状況に鋭くメスをいれるものであったがためであろう。学生時代「おまえは他者指向だよな」とか「俺は内部指向でいきたいもんだ」とか日常的に仲間内で使われたこの言葉は，日本でも時代のキーワードであった。この三類型に関する説明そのものが大著『孤独な群衆』であるのだから，これをわずか数行でまとめることは無謀な試みであるが，私は次のような例を挙げて説明することにしている。リースマンが聞いたら「そんなむちゃな」というかもしれないが，例示としては若者には分かりやすいものであること，経験的に自信がある。

20歳前後のA君とBさんは付き合っている。そして性的関係を持ちたいと考えている。このときどうするか。

伝統指向の彼らは，そこで伝統に従う。彼らの住む共同体では伝統的に婚前交渉はタブーであり，彼らの父母も祖父母も同世代の友人たちもその代々継承されてきた規範〈ノーム〉にさしたる疑問を持っていない。彼らもまたそれがあたりまえだと考えるわけである。違う共同体では違う規範が存在するらしいが，それは自分たちの行動様式を疑ったり変更したりする要因にはならない。A君もBさんも基本的に現在の生活全般に満足しているし，彼らが今住んでいるこの村，この町にこれからも住み続けるであろう。彼らを支えている生活様式の規範は，時には息苦しいものなのではあるが，それは外から見た場合にそうなのであって，彼ら自身はそれほどそのことでがんじがらめになっているとは考えない。要するに空気のようなものである。それがあるのが当然であり，自然なことである。

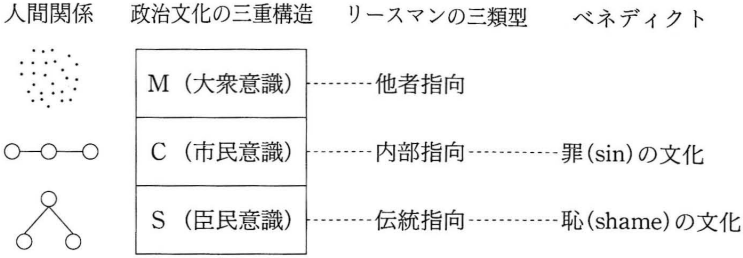
内部指向の場合の彼らはどうするか。A君は熱心なキリスト教徒である。

彼は聖書を端から端まで読み進む。「もし本当に愛し合っていたなら結婚前であろうとなかろうと問題ない。問題は伝統ではなく真実の愛である」とキリストはどこかで言明しているかもしれない。その信念で100万人の敵があろうが我行かんである。Bさんはマルクス信望者である。マルクスのことだ，この問題についても明快な解答を出してくれるに違いない。A君もBさんも自分自身の内部に肉体化された〈原理原則〉の指針を持っている。その声に耳を傾けようとする。外的環境，外在的論理ではなく，内的信念，普遍的真理に従おうとする。彼らは信頼できる人生の〈羅針盤〉を持っている。太平洋のど真ん中にいても，ヒマラヤの山奥にいても彼らはその羅針盤を頼りに進む。彼らの倫理観はどうなるか。状況倫理ではなく，普遍倫理となる。つまりどのような共同体に身を置こうと彼らの行動様式はぶれない。彼らはある意味では頑固者である。

この点は日本人論を展開する際にひとつの切り口になる。一神教なのか多神教なのかという問題ともオーバーラップするが，日本人の倫理観は状況的であり，一神教の国々の倫理観は超越的，普遍的であるという見方は簡単には否定できない。例えばルース・ベネディクトは『菊と刀』(1967年，社会思想社）の中でアメリカ人の〈罪の文化〉に対して日本人の〈恥の文化〉を対比的に論じているが，これはまさしく超越的倫理観（transcendental ethics）と状況的倫理観（situational ethics）のことそのものである。

外部指向の人間類型はどのようなものを指しているのだろうか。A君とBさんはクラスメイトであるとしよう。彼らはすでに伝統指向的環境の中にはいない。彼らは都市化の産物であり，伝統的共同体は体験としてもきわめて希薄にしか持っていない。彼らはイズムに，すなわち堅固な価値体系に囚われたくないと考えている。キリスト教しかり，マルキシズムしかり。ヘビーではなくライトに生きたいと考えている。信念という言葉は必ずしも格好よい言葉ではない。彼らは羅針盤ではなく高性能の〈レーダー〉を持っている。レーダーは広い範囲でありとあらゆる情報をキャッチするが，レーダーに写る情報は瞬時に消え去りまた新しい情報が登場する。A君とBさんはとにか

図 6



く現在ただいまの流行に敏感である。同世代のライフスタイルが例えば同棲生活礼賛となれば彼らは躊躇なくそれに自らの身を置く。彼らのロール・モデルは両親でもなく，祖父母でもなく，キリストでもなく，マルクスでもない。同世代の他者である。時には国境を越えての同輩たちである。

リースマンが分析を試みた50－60年代のアメリカは，まさしくこの他者指向のアメリカ人が台頭するアメリカであった。他者指向型人間類型の登場は人口動態とも関係する。都市化とも関係する。そしてなによりも大衆消費社会の生成，成熟と関係を持つ。

すでに理解されていると考えるが，私の三重構造性の議論とリースマンの三類型の議論はかなりの部分でオーバーラップする。それは上のように図式化することができよう。

9　若者たちそしてオウム

本稿の6，7，8で述べたように三重構造性の議論は私という人間の分析でもあり，田中角栄という戦後最も影響力を発揮した政治家に関する謎解きでもあり，リースマンの現代人分析にも関係する。上記のようにベネディクトの日本論にも関係する。だが，この三重構造性の論議でさらにどうしても付け加えておかなければならない点がある。

それぞれのメンタリティーを準備する社会そのものについて言えば，Sか

らCに，さらにはMに向かうに従って，社会的流動性が増加している点である。この場合の社会的流動性は垂直的なそれと同時に水平的なそれも指している。つまり身分階層社会崩壊の進展が一方であり，それと同時に人間の物理的居住地の流動化がそこにはある。これはなにを意味するか。コミュニティーの希薄化，または崩壊を意味する。Mそのものの問題は，それが政治的操作の対象になりやすいことだが，Mを育む社会そのものの最大の問題は共同体の崩壊という点である。社会的ダイナミズムが共同体の崩壊を準備するという点である。

伝統的共同体（Sの社会基盤である）が無残に崩壊し，新たな共同体としての市民社会（Cの社会基盤である）の成熟を見る前に，我々は大衆消費社会（Mの社会基盤）に突入してしまった。ここに現代日本の抱える深刻な問題がある。西暦2000年の現在，ジャパン・アズ・ナンバーワンなどとはもう誰も言わなくなったが，じつは私自身は，この点，すなわち社会の，そして意識の大衆化という点において，日本は超先進国ではないかと考えている。共同体の崩壊についてもそうではないかと考えている。まさしくジャパン・アズ・ナンバーワンである。そのことを象徴的に顕わにし，突きつけたのがオウム真理教であり，そこに集まった真面目な若者たちではなかったかと考えるのだ。

Mにおける人間関係の理念型は縦の関係（S）でもなければ，横（C）でもない。縦糸も横糸もあるのかないのか判然とせず，むしろその人間関係はリースマンの言うようにアメーバー状の人間関係である。これは社会の〈原子化〉(atomization) を意味している（このことを説明するのに私は新宿，渋谷を目的地なく徘徊する若者の姿を例に出す)。こうした状況の中で，新たな共同体を求めることは健全である。しかし共同体は簡単には手に入らない。本来ならば，他者との共感，自己表現，自己発見の場を渇望している20歳前後の若者たちに対しては，例えば大学が，それを可能にする，その共同体の提供者でなければならないが，日本の大学にはすでにその機能がない。

共同体としての家族はさまざまな原因で機能不全に陥って久しい。全国規模の物心両面にわたる都市化，画一化のなかで伝統的共同体が無残に崩壊していることはもちろん大きな背景としてある。

日本同様，大衆社会状況にあるアメリカで，国民のじつに40%が毎週教会に行くという。『孤独な群衆』現代版ともいうべき久々の新しい本格的アメリカ人論『心の習慣』（ベラ他，1991年，みすず書房）を読み進む中で，やはりこの大衆社会状況，特に伝統的共同体の崩壊という点については，日本はまさに超先進国であるとあらためて感じた。まさにジャパン・アズ・ナンバーワンである。このことは私自身の日米両国における生活体験からくる実感と一致する。

オウムはそのような只中に登場した。オウムを他の先進諸国のカルト集団と同列に論じてはならない。オウムの特徴はなにか。そこに集う者が必ずしも社会的弱者であったり，非知識層であったりしなかった点にこそある。高学歴で社会意識の高い若者たちが集まったことが重要である。

しかしオウムに向かった若者たちが顕にしたものは，日本における共同体の希薄化ないしは欠如の問題だけではなかった。彼らは同時にM（大衆意識）の最も厄介な問題を我々に確認させることになった。大衆操作の問題である。教祖麻原にいとも簡単に洗脳される過程は麻原の天才性というよりは高偏差値の若者たちの知的脆弱性をこそ晒したのであった。価値対立，判断対立の中で弁証法的にそれを克服する訓練の欠如である。近代市民社会はいわゆる資本主義体制とセットで民主主義体制，そして民主主義の訓練を市民に要請したが，それはとりもなおさず弁証法の技術でもあった。そしてこの技術において決定的に日本人は，日本の若者は欠落していると言える。オウムの優秀な若者たちはそのことを我々に思い知らせてくれる。丸山真男は死の直前オウム問題に触れながら，次のような言葉を吐いている。

「なにか日本はおかしいところがある。やっぱりいちばん世間を騒がしたのはオウムですね。オウム真理教ですね。ただあれが，なんか非常に変わったものとかね，自分たちと縁がない，どうしてあんなのが生まれたのかと思う方が少なくないようですけど，私は他人事とは思えません。一言にして言えばですね，

私の青春時代を思いますと，日本中はオウム真理教だったんじゃないかと，そうすると非常に良く思い当たる。一歩外へ出れば，日本の外へ出れば全然通じない理屈がですね，日本の中でだけ堂々と通用していた，それ以外の議論は全然耳にもしないし問題にもしない。理屈を言いますならば，最後に理屈を言いますならば他者感覚のなさということなんです。他者がいないんです。」(1997年8月11日放映，NHK「民主主義の発見——丸山真男」より)

1995年，サリン事件の年の春学期の私の4年生のゼミは，そのほとんどの時間をオウム問題の研究に割くことになった。学生諸君の希望で「オウム問題強化期間」としたのである。ある者はオウムショップに行き教本，ビデオ，その他のグッズを買い求めると同時にインタビューを行ってきた。あるものはオウムの作る音楽に焦点を当てて報告した。あるものはオウム問題，地下鉄サリン事件が海外のマスコミでどのように報道されているか徹底的に調べてきた。ある者は現代若者論を展開した。私の研究室でのそうした議論は毎回毎回延々と続き，ついには「石積サティアン」とあだなされることになる。ありとあらゆることを論じ合った数カ月の「オウム強化月間」の結論は一言で言えばなにか。ゼミ・メンバーの一致した感慨は「自分が入っていたとしても，ぜんぜんおかしくないよな」ということであった。

オウム幹部，上祐史浩は出所後の宮崎学との対談でオウムについて，その組織の問題について面白いことを言っている。ひとつには麻原天皇に対する〈忠誠心の競争〉があって，これが反社会的な行動の原動力になったとはっきりと認めている[5]。丸山真男が「超国家主義の論理と心理[6]」で論じた構造がそのままそこに見える。もうひとつはオウムの組織はアメーバのようなものだと言っている点である。つまりオウム内の人間関係は，じつは縦糸でもなく横糸でもなく，あのアメーバ状的人間関係，リースマンがそう象徴的に論じた大衆意識Mの人間関係の類型に酷似しているというのである。オウムは確かに大衆社会，大衆意識Mの産物であり，そこに集まった若者たちは大衆社会に対するオルタナティブを希求していたはずであるが，同時に作り上げ

たその組織は大衆意識Mの弱点そのものを，みごとに顕にしたというわけである。

表面的には過去のものとして急速に姿を消しつつあるかに見えるが，日常生活レベルでしっかりと未だ息づいている臣民意識S。ついに内面化，肉体化されることなく未だ建前のレベルにとどまっているといわざるをえない市民意識C。市民意識Cの内面化，肉体化の問題という大きな宿題を先送りしながら，時には〈ポスト・モダン〉などという掛け声とともに，ポスト・モダンならぬ〈プレ・モダン〉要素を内包しながら登場し席巻する大衆意識M。オウムは我々にこうした日本政治文化の現在の姿とその危うさを突きつけてくれたのだった。

10 おわりに

日本は世紀末のこの年2000年になっても，バブル崩壊後の長い低迷から未だ脱しきれずにいる。それどころか日本のスランプは単に経済的なそれだけではないことがいよいよもってはっきりしてきている。

この状況を，あるものは〈第二の敗戦〉という。私も第二の敗戦と言ってよいかもしれないと最近思うようになってきている。もっとも私のいう第二の敗戦は，巷間言われていることとは少しニュアンスが違う。戦後55年経って冷戦が崩壊し，アングロサクソン主導のグローバリズムの中で日本が取り残されつつある。そのことを通常，第二の敗戦と言っているようだが，私の問題意識は国際的な政治経済の競争，その中での勝ち負けではない。1945年に抱いた〈挫折感〉を挫折感といった情緒レベルから引き上げ，あらたな価値の創造，政治意識の醸成，それに基づいた共同体の構築にまでもってこられなかった，そのことを私は第二の敗戦という。敗戦の真の意味を徹底的に，根源的に問い質しあうことをサボり，経済復興，高度経済成長，バブル経済の中で我々は最も大きな宿題をついに店晒しにしたまま，55年後の今そのつ

けを支払うことになったのではないか。敗戦を逆に自己認識，自己改革の契機とすることに失敗してきたのではないか。私はそのことを指して，第二の敗戦と言うのである。

私の言う第二の敗戦は国際競争でのその問題ではない。我々自身の学習能力，再生能力の問題である。確かに戦後日本の歴史は経済的再生の歴史ではあった。しかしその経済的成功にもかかわらず『人間を幸福にしない日本というシステム』（ウルフレン）などという著書が，妙な説得力をもって我々に受け入れられるこの現実をこそ問題にしなければならない。

三重構造性の議論は，じつは完全な私の独創というわけではない。この着想と枠組みは政治学の碩学，故原田鋼先生がすでに私に話され，私もまたそれに肉付けしたりしていたものである。私は原田先生の下で国際大学の助手・講師を勤め，先生亡き後も，また私自身が国際大学を去り非常勤講師となってからも，主として外国人学生相手に日本政治を語ってきた。ここで論じた多くはそうした討論の中で形を変えてきている。原田先生はその最後の著書となった『政治権力の実体』（1989年，お茶の水書房）第4章において短くこの考え方を紹介されているが，私のその後の検討をここではまとめることにした。じつはこれをベースにしながらも，さらに展開しなければならない点が多くある。しかし，いずれにせよ，このひとつの日本論，現在ただいま起こっている日本社会の出来事に関して，何らかの形で，分析の視角と今後の展望を見出すための，少なくともひとつの手だてにはなるはずであると考えている。

注

1) ここで提示される日本政治文化の三重構造性の論議は，新潟県にある国際大学で提示し長年にわたり私のクラスで議論してきたものである。ここ数年，海外技術者研修協会で同様なプレゼンテーションを行っている。いずれの場

合も20－30代の日本専門家ではない人々が中心である。

2) オランダ人ジャーナリスト，カレル・ウルフレンはその著『人間を幸福にしない日本というシステム』(1995年，毎日新聞社）で日本人の「しかたがない病」について論じている。一方『日本の知識人へ』(1995年，窓社)，『日本・権力構造の謎』(1990年，早川書房)，その他の著書の中で政治は価値選択の問題であり，我々は文化とか風土とかに逃げ込むわけにはいかないのだと論じ，彼に対する西洋中心主義者あるいは普遍主義者の批判に応えている。

3) 『回想・神島二郎』(神島二郎先生追悼書刊行会，1999年所収)

4) 山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』1984年，中央公論社，第４，５章

5) 宮崎学『オウム解体』2000年，雷韻出版

6) 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』1964年，未来社